

---

# 「ハンパク 1969—反戦のための万国博—」 展示について

## ハンパクプロジェクトメンバー

(田中聡<sup>1)</sup>、加國尚志<sup>2)</sup>、大野光明<sup>3)</sup>、番匠健一<sup>4)</sup>、福井優<sup>5)</sup>、兼清順子<sup>6)</sup>、西山直子<sup>7)</sup>、田鍬美紀<sup>8)</sup>)

---

### はじめに

ベトナム反戦運動や70年安保闘争が熱を帯びていた1969年、真夏の大阪で「反戦のための万国博」(通称「ハンパク」)が開催された。翌年に控えた大阪・千里丘陵での日本万国博覧会(大阪万博)に向けて盛り上がる世相に対して、ハンパクは「人類の平和と解放のために」を掲げ、自らの手で反戦と平和の文化を発信しようと延べ6万人ともいわれる人びとが整備途上の大阪城公園に集まった。

立命館大学国際平和ミュージアム・平和教育研究センターでは2018年からプロジェクト研究「博物館の資料研究〈戦後社会セクション〉」の一環としてハンパクに関する共同研究を開始した。メンバー8名の役割分担は、取りまとめ役として田中聡、加國尚志、調査・研究班として大野光明、番匠健一、福井優、展示班として兼清順子、西山直子、田鍬美紀である(2019年度現在)。共同研究の初発の問題意識は、①1969年当時、ハンパクに多くの社会的関心が集まっていたにも関わらず、その全体像は必ずしも明らかになっていないこと、②2019年にハンパク開催50年を迎え、その回顧と検証の良い機会となりうること、③2020年の東京オリンピック、2025年の大阪での万博の開催を控えるなか、メガイベントへの民衆の抗議と抵抗の歴史を考える意味が増していると考えられること、などである。これまで、研究会メンバーは文書資料・モノ資料の調査や関係者への聞き取りを継続的に行ってきた。具体

的には、九州大学大学文書館、国立歴史民俗博物館、成田空港 空と大地の歴史館、桃山学院史料室、立教大学共生社会研究センターでの資料調査、ハンパク事務局のメンバーや福岡ベ平連、関西ベ平連の運動参加者などへの聞き取り調査を行った。調査結果をふまえ、これらのアーカイブズおよび個人所蔵の資料を借り受け、2019年7月17日～8月24日に第125回ミニ企画展示「ハンパク 1969—反戦のための万国博—」を開催した。本稿では、ミニ企画展示「ハンパク 1969—反戦のための万国博—」の開催に至るまでの調査・研究、展示の準備過程、成果と課題について報告するものである。

### 1章 「反戦のための万国博」の調査・研究 (番匠健一・大野光明)

ハンパクは、これまで小田実や針生一郎、鶴見良行らの回想や同時代の論評によってのみ知られていた<sup>9)</sup>。『朝日ジャーナル』をはじめ各種雑誌・新聞記事において報道はあるものの、「ベ平連的」な面白さや粋にはまらない部分を強調する傾向にあり、実態把握がほとんどなされていなかった。こうしたなかで美術史では黒ダライ児の万博破壊共闘派に関する研究<sup>10)</sup>や、2017年10月から神戸市立美術館で開催された「Japan Kobe ZEROの軌跡」展などではハンパクに対する高い評価がなされている。またベ平連研究においても鶴見俊輔や小田実、吉川勇

一など東京を中心とした運動研究から、地域ベ平連の実態解明へと研究軸が移動している<sup>11)</sup>。ハンパクの参加団体は、全国各地域、各大学のベ平連、日大・東大の全共闘、各地のフォーク・ゲリラ、声なき声の会、キリスト者平和の会、家永訴訟を支援する市民の会、日中友好協会、キューバ文化省、「京都橋の下大学」など様々であり、ハンパクの実態解明を進めることによってベ平連だけではない学生運動、婦人運動、労働運動が集まり、様々な社会運動の横のネットワークの関係性の広がりをつかむことができるのではないかと。こうした社会運動のネットワークは、地域で社会運動を進めるグループが地域独自の課題を発見していくプロセスに関わっている。こうした見通しのもとに調査・研究は進められた。

2018年6月15、18日及び2019年1月23日の日程で大野・番匠が立教大学共生社会研究センターで資料調査を行った。同センターのアーキビスト・平野泉氏の助力を得て、吉川勇一氏旧蔵「ベ平連」関連資料リストから「北摂ベ平連ニュース」、「ちゃりんぼ」（京阪及び片町沿線ベ平連）、「HOB通信」（東大阪ベ平連）などハンパクに関する記事が掲載された地域ベ平連を見つけることができた。また、ハンパク会期中に刷られた「日刊ハンパク」についても1号から5号までの所蔵が確認され、期間中の会場での出来事や飲食物の販売に関するトラブルへのハンパク協会の対応などが明らかになった。また同センター所蔵の鶴見俊輔スクラップブックは、当時のヴェトナム反戦運動の資料が網羅的に収集されており、ハンパクにいたるヴェトナム反戦運動の流れを見通すことができた。さらに鶴見俊輔スクラップブック「大阪反戦万国博」は、ハンパクをめぐる新聞・週刊誌・サークル誌・手紙などが網羅的に集められ、各メディアによってハンパクがいかに語られたのかを知ることができる重要な資料であった。当初、展示資料の実態解明がどの程度までできるのか不透明であったが、共同研究の初期の段階で立教大学の資料にアクセスできたことによって、研究・展示の見通しを立てることができた。

また各地のハンパク参加者を追跡調査することも同時に行った。2018年6月2、3日に九州大学箱

崎キャンパスにて「語ろう「あの日 あの時 この時代」ファントム墜落50年・さよなら箱崎キャンパス記念集会」が行われた<sup>12)</sup>。番匠がこの集会に参加し、会場内の武内俊造氏の写真アルバムのなかにハンパクの写真を発見し、関係者から連絡先を聞くことができた。2019年3月23から25日にかけて、福岡市内で福岡ベ平連関係者の聞き取り調査を行い、九州大学構内へのファントム墜落事故から福岡ベ平連の活動、そしてハンパクへの関わりについて聞き取り調査を行った。その結果、ハンパク会場での様子に加えて、ハンパク前後になんだいべのメンバーがよく福岡を訪れていたこと、福岡天神のフォーク集会が数年間継続されたこと、生協運動との関係などを知ることができた。

2018年7月24、25日と桃山学院史料室の昭和町資料室（2018年夏に大阪府和泉市まなび野の桃山学院大学和泉キャンパスに移転）で、大野・番匠（資料調査）と福井・西山（資料撮影）が玉置栄二氏（桃山学院史料室）の助力を得て調査を行った。桃山学院は、1960年代の大阪の学生運動の拠点であり、収集されたビラが目録化が進んでいる<sup>13)</sup>。またハンパク協会代表の山田宗睦や一時期は小田実も教員を務めていた一方で、1968年に万博キリスト教館全国委員長に就任し、のちの大阪万博キリスト教館会長になる八代斌助が理事長であった。ハンパクのなかでも評判の高かったキリスト教館の資料はなかったものの、関西地域のベ平連の資料を数多く確認することができ「ハンパクニュース」や「日刊ハンパク」（立教大学の所蔵資料の欠号分）などを発見し展示に生かすことができた。

2019年3月11から13日にかけて千葉の国立歴史民俗博物館、および成田空港 空と大地の歴史館を番匠、大野が訪れて資料調査を行った。ハンパク会場で小川プロダクション（以下、小川プロ）の『三里塚の夏』『圧殺の森』などが上映されたが、ハンパク協会と小川プロとの関係、機材の貸し出しや小川プロのフィルムの搬入経路、そしてハンパク会場を小川プロが撮影しており映画化する計画があったという証言などを調査するためである。国立歴史民俗博物館では、原山浩介氏（国立歴史民俗博物

館)、相川陽一氏(長野大学)の助力を得て両氏が資料整理を進める小川プロ資料から、ハンパク関連の内容を調査させていただいた。その結果、小川プロが残した詳細な電話のやり取りの記録「電話ノート」のなかにハンパク協会の記録を発見することができた。1969年7月12日に東京の渋谷山手教会にてハンパク事務局が主催の集会があり、「三里塚の夏」が上映された。電話連絡帳には、「『三里塚の夏』上映の件、無料でやらせてもらえないか(OKをだした)。7/12に上映会、戸村(一作)さんの講演、針生一郎、滝こうじのシンポジウムをやるわけですが、その具体的な話し合いを6/29 6:00に原宿のベ平連のあるビルの三階の婦民ホールでやりたい。出席してほしい。」との記載もある。また大阪でのハンパクのスケジュールの問い合わせや、ハンパク会場でのパネルディスカッションに小川プロに呼びかけるやり取り、三里塚のパネルの持ち込みなどは急遽決まったことなどの電話記録が見つかり、展示に生かされた。空と大地の歴史館では、波多野ゆき枝氏の助力を得て小川プロ資料の調査を行った。小川プロ独自の上映運動を通じた社会運動のネットワークが確認できたが、ハンパクに直接関係する資料及び小川プロがハンパク会場でフィルムを回していた事実は確認できなかった。

聞き取り調査では、ハンパクの運営側の中心であった関西ベ平連の山本健治氏、および関西ベ平連でハンパク協会事務局長の木村満彦氏の聞き取り調査ができたことが大きな意味を持っている。無数の団体が集まるハンパクの運営側からの視点は、イベントスケジュール表に予定外のハプニングを含むハンパクの全体像を視野に入れることが可能になった。山本氏については本展示期間中に関連企画としてトークイベントを開催することができた。

本調査を通じて、ハンパクで繋がっていた社会運動のネットワークを50年後にたどりなおす作業を行ったが、ハンパク参加者がその後50年をいかに生きたかを知る機会ともなった。ハンパク思想は、1960年代の経験がその後どのように生きられたかという問いと共に検証されることで、より重い意味を持つことになる。

## 2章 展示の準備と考察(兼清順子)

2019年3月、それまでの資料調査と聞き取り調査をもとに、プロジェクトメンバーが展示の検討を行った。「ハンパク」に関する先行展示は少なく、調査で浮かび上がった論点を展示の構成に反映することとなった<sup>14)</sup>。また、当時の状況とハンパクの特徴を展示の限られた空間の中で表現する演示の工夫も課題となった。

展示構成を検討する上で出た主な論点は、「ハンパク」の特徴であるハプニングを含め(1)ハンパク会場での様々な実践とその熱気、(2)準備過程での議論(背後の思想)、(3)フォークや前衛芸術、映画など様々な反戦文化の広がり、(4)各地の問題が持ち込まれ、議論され、地域に反戦平和の文化として持ち帰られたこと、(5)立案・実施側、文化人やメディア、一般参加者などハンパクに関わった多様な人びとの受け止め方とそれを踏まえた総括であった。展示は調査研究の中間報告でもあり、これらを、およそ展示の各章として展開するため、1.はじめに(当時の情勢、反戦文化)、2.閲覧のよびかけ(発案、準備)、3.ハンパクの5日間(ファントム、小川プロダクションを含む)、4.(地域とハンパク、ハンパク以降)の構成で展示をまとめることとした。ただ、参加者の経験を新たに集めることは難しく、総括はハンパク参加経験として各地の通信などに投稿された声を拾う形になった。

また、展示品の多くはガリ版刷りのビラや通信である。文面を読み込めば、ユーモアのきいた記述にクスリとなったり当時の若者の息遣いも感じられるが、一瞥するとわら半紙ばかりで陳列に動きがでない。

こうした資料を中心にしながら、生き生きとした熱気を瞬時に体験できる展示室の演示の工夫も行った。

まず、展示に立体感を出すため、入口から目に入る1.はじめにのコーナーにモノ資料を陳列した(図 会場のレイアウトを参照)。ハンパク由来の品ではないが、ここにゼッケンとガリ版を出品した。「アメリカはベトナムから出ていけ」と手書きで記

されたゼッケンは、反戦平和を訴えるために個人が身につけていたものであり、関西ベ平連の梅田地下街のフォーク集会でも参加者がこうしたゼッケンをつけていた。ハンパクの背景となった個々人の行動や身につけていた人びとの存在が感じられる資料である。ガリ版は、この時期を含めて重要な情報発信のための道具だった。モノ資料を通してチラシやビラがどのように作られたのか想像することが可能になれば、それらを観る視点が広がり、その後のわら半紙ばかりの陳列にも関心が続くことを期待した。特に最初のコーナーでは来館者がこの時代に対して抱くビジュアルイメージの喚起も意識して雑誌やレコードなど当時の世相が視覚的に伝わる資料を中心とした展開を重視した。その後、ハンパクの発案、準備など紙資料をまとめて陳列した。

そして、展示室の正面奥をハンパク会場に見立て壁面一面に、ハンパクの様子を撮影した個人蔵の写真を展示した。当時の学生が、複数日に渡り会場を訪れて撮影した貴重な写真である。ハンパクでの時間軸の流れ、対象や参加者の様子のバランスなどを見つつ一定の流れを作りながらも、各写真に説明を加えることなく張り出すことで、雑然とした熱気をかもし出した。また、ハンパクでの出来事を毎日伝えていた「日刊ハンパク」（複製）やプログラムも共に展示した。更にこのエリアで、ハンパクで上映されていた小川プロの作品抜粋を流し、ギターや小旗（これらはともにイメージ展示）のディスプレイも施し、ハンパクの雰囲気や演示を通して伝えることを試みた。

また、本展ではハンパクに焦点をあてたため、ベ平連運動やベ平連やハンパクを担った人物等の説明は会場で配布する「ハンパク」関連用語解説と年表「ベ平連と「ハンパク」のうごき」（ともに作成は福井優）によることとした。

今回の展示と講演会を通して集まったアンケートは26枚、演示方法に対する具体的感想はなかったが、「当時の「ハンパク」のエネルギーを感じた。」「展示は小規模ながらコンセプトが際立っていた。」「整理の行き届いた展示だと思いました。」といったコメントが含まれており、来館者がハンパクの趣旨

と熱気、そして研究成果の論点を体感的に理解できる構成と演示がなされていたと考えられる。なお、陳列について、一部コーナーが暗かったとの指摘があったが、わら半紙という資料の性質上、資料保存の観点から照度を落とした。また、この課題の対策として、「日刊ハンパク」など、特に来館者に読み込んでほしい資料は、複製にしてアクリルに挟み、あえて明るく見せる展示方法も採用した。20世紀中盤、様々な運動がおり、多くの人々が手軽にビラや記録を作成することができるようになった。粗悪な質感も雑然とした雰囲気も当時の息吹を伝えるものだが、それらの紙の束を飽きることなく読んでもらう工夫こそ今後もこうしたテーマを扱う展示に求められる課題である。

#### 小括

本展示は共同研究の中間報告的な性格をもち、これを起因として新たな資料や関係者と出会い、調査をさらに進展させたいとの意図もあった。実際に、本企画展示を通じてハンパクの規模の大きさと広がり、豊かさが明らかとなり、今後の資料の収集とインタビュー調査の継続の必要性を感じることもあった。また、ハンパクとは何であったのかを明らかにするには、そこに集まった人びとがハンパク以前／以降、どのような社会運動や文化運動に取り組んでいたのか、ひいてはいかなる生き方を選択していたのかという複数の個人史をみていく必要があるだろう。

### 3章 展示内容

#### 1. 「ハンパク 1969 —反戦のための万国博—」

##### 展示内容（番匠健一・大野光明）

本章では、企画展示のパネルの文章と会場の写真を掲載する。なお、パネルの明らかな誤字脱字については本稿で修正を行った。

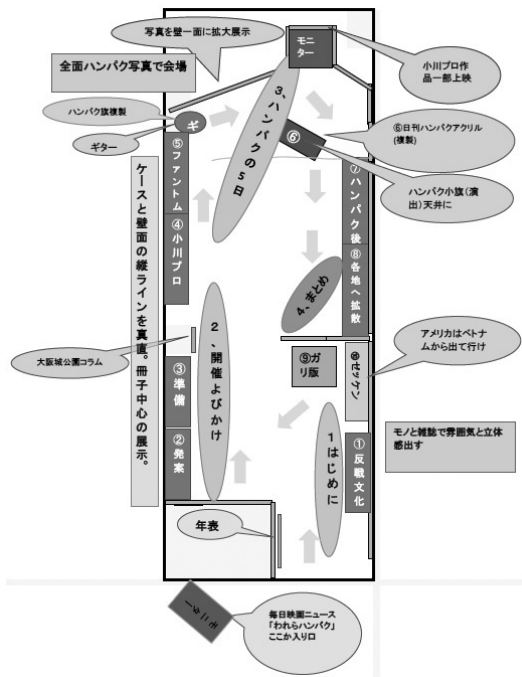


図 会場のレイアウト



写真1 会場入口

### 1) はじめに

1960年代末、国家や資本主義のもたらす矛盾への異議申し立てが世界中で湧き起こっていました。ベトナム戦争反対、アメリカの公民権運動、「プラハの春」、中国の文化大革命など、発達したマスメディアが盛んに報じたこともあり、人びとは触発しあい世界同時的な動きをつくりだしました。日本では、1970年の日米安全保障条約の延長やベトナム戦争などの政治的課題に対し、人びとが声をあげていました。高度経済成長を機に表面化した公害問題を訴える運動、大学闘争、カウンターカルチャーの興隆といった、経済、社会、文化をめぐる広範な異議申し立てが起こりました。

一方、1970年3月からの大阪・千里丘陵での日本万国博覧会（大阪万博）開催に向けた準備が進んでいました。大阪万博は「人類の進歩と調和」をテーマとする巨額の国家プロジェクトでしたが、これに対し、70年安保をはじめとする目前の諸問題を覆い隠すものだと批判がありました。

本展では、いまから50年前の69年8月に大阪城公園で開催された「反戦のための万国博（ハンパク）」を紹介します。ハンパクは、大阪万博への抗議にとどまらず、自らの手で反戦のための文化を表現する人びとが結集した、まじめで、ユーモアに満ちた、破天荒なイベントでした。

### 2) 当時の情勢

1969年前後の日本では、ベトナム反戦運動が盛り上がりを見せていました。中でも「ベトナムに平和を！市民連合」（ベ平連）は、参加者の自発性を重視する運動を展開、全国で300以上の地域ベ平連がつくられるまでに広がっていきます。これらの反戦運動は、日本と沖縄が米軍のベトナムへの出撃、訓練、補修や補給などの拠点となっていることを批判し、戦後の「平和」を根本から問うものでした。同時に、水俣病をはじめとする公害問題や三里塚での新国際空港建設問題など、それぞれの地域での住民運動へと展開しました。その潮流の中で、大阪万博も注目を集めていったのです。

#### コーナー1 反戦文化

ベトナム戦争反対をいかに表現するか。それは戦争特需によって高度経済成長をとげ、米軍基地を有する日本に住む人びとにとって、日常の生活文化を根底からとらえ直すプロセスでした。ベ平連の運動においても、新しい反戦文化を作ろうとする動きは熱気を帯びていきます。京都では、ギターを手に取り自らの日常を歌や詩にのせる若者たちが「フォークキャンプ」に集い、京都ベ平連の「三条橋の下水道」や「反戦祇園祭」につながって行きました。大阪では南大阪ベ平連や北摂ベ平連がデモや集会でギターを使い、天王寺公園や阿倍野地下街、梅田の地

下街などでフォークソングによって人びとを対話の渦へと巻きこんでいきます。音楽を手段とした反戦文化の大きなイベントが定期的で開催されるなかで、ライブハウス黎明期の喫茶店はこうした音楽文化を街の空間に定着させ今日まで伝えていきます。反戦歌集をたずさえたフォークキャラバンは全国に広がり、反戦文化の象徴のひとつとなりました。



写真2 会場の様子1

## コーナー2 発案

大阪・阿倍野のアパートの一室を事務所とする南大阪ベ平連は、戦後生まれの若者が中心となって、天王寺公園や阿倍野の地下街での反戦対話集会の開催、ビラまき、ポスター貼り、デモへの参加などの活動をしていました。1968年10月、なんだいは「反戦文化フェスティバル」を大阪府職員会館で開催しました。それは、中川五郎のフォークソング、詩の朗読や劇など「反戦文化」の集大成となったイベントでした。フェスティバルで手応えを得たなんだいは、同年12月から翌年1月にかけて、「反戦のための万国博（ハンパク）」を考案、提起します。それは、大阪万博へのアンチテーゼにとどまらず、戦争と体制側への異議申し立てと、そこから生じる「反戦文化」を結集させる「反戦万博」を目指すものでした。呼びかけに応じて関西ベ平連など13団体が集まり、「反戦のための万国博協会（ハンパク協会）」が設立されると、目的や時期などについて討議が行われていきました。大阪を中心にいくつかの地域ベ平連が知恵を出し合い、同年8月のハンパク開催が決定されました。2月にはベ平連全国懇談会でも提案され、全国規模の行動として準備

や宣伝が行われていくこととなりました。

## コーナー3-1 準備

開催までの約6ヶ月間、ハンパク協会を中心に、知恵・金・情報・行動を集めながら急ピッチで準備が進められていきました。ハンパク協会代表には桃山学院大学社会学部教授の山田宗睦が就き、日常的な実務は関西ベ平連、南大阪ベ平連、東大阪ベ平連などに参加する市民が進めました。会場は、運動のなかで交流のあった大阪市職員労働組合の支援を得て、大阪城公園に決定します。ハンパクのプログラムは、催物（ハンパク市民大学、映画、演劇、討論会など）、出展物（各地の運動体が行っている課題や活動に関するパネルやポスターの展示）、憩いの広場（売店や食堂の設置）などが計画され、各地に参加が呼びかけられました。予算の見積もりは400～500万円といわれ、知識人・文化人からの大口のカンパだけでなく、ハンパク協会が発行した『ハンパクニュース』、ハンパクうちわやハンパクポスターなどのグッズ販売の売り上げも貴重な財源としてあてられました。大人数の参加者に対応できる巨大テントやトイレの確保などの難問への対処も、知恵とツテを駆使し準備されていきました。



写真3 会場の様子2

## コーナー3-2 大阪城公園

現在、大阪城公園は人気の観光スポットですが、明治政府はこの一帯を陸軍用地とし、第四師団司令部や大阪砲兵工廠を置きました。工廠は日清・日露戦争とともに成長し、日本最大級の兵器工場となりました。戦時中は立命館大学でも構内の日本刀鍛錬

所で工場からの受注による軍刀を鋳造していました。1945年には一般工員、女子挺身隊員、朝鮮人徴用工、学徒動員など、約6万7,000人が働いていましたが、8月14日の第8次大阪空襲で壊滅しました（死者700名以上）。敗戦後、工場跡は巨大な廃墟のままでしたが、1950年代なかばに廃墟から鉄くずを運び出す「アパッチ族」が現れ、のちに小松左京や開高健、梁石日などの小説によって知られるようになりました。1970年の大阪万博に合わせた整備が始まると、大島渚監督の『太陽の墓場』（1960年、松竹）のロケ地として使われた頃に比べ、60年代後半には廃墟が撤去されていました。ハンパク企画者の中には廃墟を毎日のように見て育ったものもいました。この場所でハンパクを開催することは、日本帝国の侵略戦争のための兵器工場跡が大阪が商業都市ではなく軍事都市であったことを忘れるなというメッセージも含んでいました。そこは、進歩と調和という万博の光に目をくらまされることなく、高度経済成長の裏側にある公害や差別、ベトナム戦争への加担を同時に考える場でもあったのです。

#### コーナー4 小川プロダクション

小川プロダクション（小川プロ）とは三里塚シリーズで知られる小川紳介監督ひきいるドキュメンタリー映画製作集団です。小川プロの作品は、各地に設けられた事務所を通じて市民団体や労働組合、学生自治会・サークルなどが上映母体となる「上映運動」を通じて、全国で公開されました。1967年から千葉・三里塚で農民と共同生活をしながら撮影を始め、77年までに8本の三里塚シリーズを製作しました。1974年からは拠点を山形県に移します。小川は山形国際ドキュメンタリー映画祭の創設に尽力し、多くの映像関係者を育てるなど日本映画界に貢献しました。「成田空港 空と大地の歴史館」には、三里塚闘争に関わる地元農民・住民や全国各地の運動体と個人の資料が所蔵されており、小川プロ資料もそのひとつです。ネガやラッシュ、音声テープのほか、制作ノートや上映記録、ポスター、ピラなどの資料にはプレハンパクへのフィルム貸出、ハ

ンパク協会とのやり取りを示す貴重なものが含まれています。

#### コーナー5 ファントム

1968年6月2日、九州大学箱崎キャンパス内で建設中の大型電算機センターに、アメリカ空軍所属のファントムが墜落しました。ファントムは米軍板付基地所属であったこともあり、この出来事によって基地撤去を求める声は急速に広まり、福岡の反戦・反基地運動を大きく成長させる契機となりました。九州大学内では、大学がファントムの機体を自主的に引き降ろすか否か、機体を米軍に引き渡すか否かといった対応をめぐる激しい議論と運動が起こっていましたが、翌年1月に機体は引き降ろされました。

福岡ベ平連はハンパク会場にこのファントムの残骸を持ち込みました。5月30日大阪プレ反博のコンサート会場でハンパク事務局は福岡ベ平連にファントムの残骸を展示できないかと打診しました。両者の間で、万が一問題となった場合には関西ベ平連が法廷闘争を受けもち、法の前で日米安保条約そのものを問おうとの言葉が交わされました。福岡で定期的に行われていた十の日デモが終わると、福岡ベ平連メンバーは監視を避けて前日にファントムの残骸を積みこんでいた車で大阪へと出発。高速道路も整備されていない当時、夜を徹してハンパク会場に向かいました。こうしてファントムはハプニング的に登場し、手書きの「ファントムの位牌」とともに展示され、焼けてボロボロになった機体は来場者たちによってむしり取られていったといえます。ハ



写真4 会場の様子3

ンパク会場の周囲は機動隊が固め、私服警官も多く入っていましたが、アマチュア無線集団が警察の無線を傍受し、ファントム展示への介入を計画していることがハンパク事務局側で共有されていました。そこで、大雨が降った会期4日目、ファントムの残骸はひそかにテントの中に運び込まれ、警察の目を避けるように会場の外へ持ち出されました。

### コーナー6 ハンパクの5日間

1969年8月7日、「人類の平和と解放のために」をスローガンとしたハンパクの5日間が始まりました。ハンパク事務局の発表では入場者数は延べ6万人。マスメディアも盛んに報じ、大きな注目を集めました。

ハンパクでは、予告されていたプログラムだけでなく、さまざまな「ハプニング」も続出しました。開会式はファントムの残骸だけでなく、突然現れた自作木炭蒸気機関車「ゼロモギラ号」に会場が沸きました。会場の様子は速報紙「日刊ハンパク」を通じて共有されました。三つの大テントでは講師を招いての市民大学やティーチイン、ハンパク劇場や音楽ステージではパフォーマンスやゲリラ的なフォーク集会、白い布を張った野外スクリーンでは『網走番外地』（1968年東映）、『三里塚の夏』（1968年小川プロダクション）など映画上映が行われました。夜が深まるにつれて1万坪の会場の暗い地面の上に、たくさんの小さな人の環がつけられました。ハンパクは、各地の運動とそれに結びつく詩・歌・演劇・映画・芸術などが結集し、参加者自身によって即興的につくられた大きな解放区となりました。



写真5 会場の様子4

しかし、解放区としてのハンパクは同時に、いくつかの対立や緊張をとまなうものでした。会場内で営業を始めたホットドック屋をめぐる激しい議論と警察による介入、日大全共闘による問題提起をひとつのきっかけとしたハンパクや反戦運動のありようをめぐる討論、反戦と芸術との関係性についての議論など、連日の「造反」と「ハプニング」に注目が集まりました。最終日の御堂筋デモは、ハンパクのフィナーレとして1万人が路上へとくり出しました。予定されたスケジュールどおりにデモをすることを拒否し討論を続けたグループもあり、最後まで運動と表現をめぐるさまざまな声のあふれた場でした。

### コーナー7 地域とハンパク

ハンパク協会の発表では各地から約200の参加団体がありました。それぞれの地域の課題と声が会場に持ち込まれ、また、ハンパクを通じて各地の運動と表現やスタイルに触れた参加者がその経験を地域へと持ち帰る——このような地域との往復がハンパクのひとつの特徴でした。

たとえば、千葉べ平連と千葉大べ平連は「三里塚館」において住民の意思をかえりみることなく空港建設計画が進む三里塚闘争の現状を伝えながら、日常のなかの「戦争と侵略の道」に自覚的であろうと問いました。「ハンパクキリスト教館」では「汝殺すなかれ」をテーマに、三里塚・芝山連合空港反対同盟委員長の戸村一作や、フォークシンガーの高石友也、牧師の村田拓などがキリスト者の立場から、大阪万博に予定されている「キリスト教館」を批判し、それとは異なるキリスト者のありかたを訴えました。沖縄べ平連は、原子力潜水艦や戦略爆撃機B52の展開など、ベトナム戦争と直結した沖縄の現状を伝えました。このように各地からの参加者・参加団体は、地域のなかにベトナム戦争や高度経済成長をめぐる問題を「発見」し、それを問い、共有していったのです。

### コーナー8 ハンパク以後

ハンパク以降、沖縄返還問題と70年安保は全国





写真6 会場の様子5

規模の課題として取り組まれ、巨大な闘争となりました。特に70年安保闘争を含む1970年は、運動史の一つの山場となったといえます。同時に、1970年3月から大阪万博が開催され、6,400万人を集めるメガイベントとして社会的関心を集めました。

そのなかでハンパクに集まった人びとは、沖縄闘争や安保闘争だけでなく各地域の諸課題への取り組みを深めていきました。たとえば、関西ベ平連は「千里じゃなくてあいば野へ」と呼びかけ、滋賀・饗庭野や大阪・能勢のナイキミサイル基地反対など地域闘争を進めます。また、米軍機修理を行っていた新明和工業（豊中市）に対する抗議活動を続けていた北摂ベ平連などは、定例の抗議デモを続け、1971年の修理中止決定に影響を与えました。

ハンパクを経験した人びとは、その後の人生をいかに生きたのでしょうか？

国際平和ミュージアム平和教育研究センターでは、ハンパクを含む戦後の反戦平和運動の調査を今後も続けていきます。関係された方々や資料をお持ちの方などの情報提供をお待ちしております。

## 2. 展示に寄せられた意見・感想

当方、65年入学（産社1期生）、69年卒業。この時代をリアルタイムで学生運動、反戦、平和運動に関わりました。朝日ジャーナル、週刊・・・（又はマガジン）、その他資料直接知っております。三里塚の映像、反対同盟議長戸村一作氏（クリスチャン）は機動隊に襲われ重症。

又老人決死隊の三里塚のお婆さんを写したフィルムなど、誠に貴重な存在です。ベ平連三人男（鶴見俊輔、小田実、安田武）のパネルも欲しかった。大阪万博には東京より2回訪問しております。ソ連館大人気。

（京都府70代以上 アルバイト）

当時の「ハンパク」のエネルギーを感じた。若い参加者が多くて驚いた。今の若者じゃ考えられないエネルギーと刻動力。

（京都府20代 立命館大学文学部4回生）

自分のイメージのハンパクと違ってびっくりした。日本とは思えない写真がたくさんあっておどろいた。

（兵庫県10代 高校生）

ハンパクという見慣れない言葉の意味が詳しく分かってよかった。学びが深まって嬉しかった。

（大阪府10代 高校生）

プロジェクトの研究成果が充分活かされた良い展示で、1969年当時の熱気も伝わって来た。若い世代にこそ見せたい内容だが、夏季休暇中の開催だと困難。勿体なかった。もっと広く宣伝すべき。この内容ならば、現代史に関心がある人たちにかなりアピールすると思う。

（京都府50代 大学教員）

今回の企画で初めてハンパクのことを知りました。ユーモアを交えながらも平和を願ったこのような催しがあったことを知れて良かったです。

（大阪府20代 高校教師）

ハンパク見に行きました。ちょうど50年前、高二です。あの時出会った人たちはどうしているのかなあ、お亡くなりになった人も多いでしょう。反戦・非戦、志を持ち続けている人もいでしょう。もう一度戦後をていねいに検証すべきでしょう。（「日本」の歴史全体の検証も

必要でしょうか) 同じ夏の「ウッドストック」50年でもあります。

(大阪府 60代 通信制大学生)

50年前の高校三年生の時に、朝日ジャーナルで知ったと思うが、ハンパクのことを知り電車で大阪城公園に行きました。セクトに入っていたわけではありませんが、じっとしてはいけないうんじやないかという思いがあったのです。一昨日、京都シネマで「新聞記者」という映画、またNHK BSで「野火」という映画を続けて観たのですが、時代はどんどん悪くなっているように思えます。今後も色々な企画をお願いいたします。近所ですので時々入館しております。でも立命で「ハンパク」の展示は驚きです。時代が変わったのでしょうか。いいことだと思います。－OB

(京都府 60代 無職)

70年安保を前に主に67/10/8からいろいろな闘いが展開されました。なかでも「ハンパク」は「政治主導」ではなく「文化」をとりこんだユニークな、でもわりにまじめな闘いだったと思います。ほんの50年前のことなのですね。歴史はキチンと検証したいです。(当時高二、ハンパク行きました)

(北海道 60代)

ハンパクが存在すら知らなかったけど、この時代にも若い世代を含む人たちが自主的に動いていたことを知ることができて、とてもおもしろかったです。

(大阪府 30代 会社員)

ハンパクをここまでくわしく展示したものを初めて見ました。討論の場の提供と自由・自治空間を創出することが、万博とその文化への対抗になっていたのだと思いました。大阪で再び万博があるので、大阪でもやってほしい展示でした。

(大阪府 30代)

写真、各種資料の展示もですが、年表に感動しました。何かの折に活用させていただきたいです。写真NGだったので、資料か何かあれば欲しいです！

コンパクトでしたがとても面白く興味深く観ました。整理の行き届いた展示だと思いました。

(福岡県 70代以上)

69年に立命大理工学部に入学して、大学闘争の一端を垣間見ました。直接闘争には参加しませんでした。クラス討論などはたまにあり、女子学生数人でエンゲルスの「家族・私有財産・国家の起源」やボーボワールの「第二の性」など読書会をし、その後の生き方の原点になりましたが、ハンパクのことは知らず残念。

(京都府 60代 ミュージシャン)

同じ1969年に、わだつみ像は破壊されました。その破壊は、長期にわたる学園紛争の最期のエポックでもあったと思います。1,000をこえる学生が傷つきました。傷つけた側のヘルメットを忘れることできません。それが、毎日ニュースの映像に出てくる「全共斗」です。何の注釈もなしに展示するのは、到底賛成できません。しかも、三里塚とか日大闘争、東大闘争、毛沢東賛美となると、当時の極一部の暴力的学生運動の紹介にしかありません。大学でのベトナム反戦の取り組みを行ったのは、当時の立命一・二部学友会です。お忘れなきよう。

(京都府 70代)

もっと展示場所が大きくても十分やれるでしょう。よい企画です！

(大阪府 30代 演出家)

### 3. 用語解説、出品一覧（会場配布資料）

立命館大学国際平和ミュージアム 第125回ミニ企画展示

# ハンパク

# 1969

## 一反戦のための万国博

2019年 7月17日(水)～8月24日(土)

用語解説・出品一覧

立命館大学  
国際平和ミュージアム  
Kansai Museum of World Peace  
International Museum of Peace

#### 「ハンパク」関連 用語解説

##### ○ベトナムに平和を！市民連合（ベ平連）

米軍による北ベトナム爆撃開始を契機としたベトナム戦争の激化を受け、1965年4月に東京で結成されたベトナム反戦を訴える市民運動。小田実や鶴見俊輔、開高健ら知識人と無党派市民などが運動を担った。定例デモやフォーク集会、反戦広告、米軍脱走兵の援助といった、政党や労働組合による既存の革新運動にとらわれない、市民の自発性を重視するユニークかつ画期的な運動を展開した。運動の輪が広がるにつれ、全国で300以上の地域ベ平連が結成され、それぞれの地域課題に取り組み独自の運動を展開した。関西では、1968年に南大阪ベ平連（なんだいべ）が「反戦文化フェスティバル」、69年に京都ベ平連が「反戦紙国祭」を開くなど、個性的な「反戦文化」が形作られていた。そのような流れの中からハンパク（反戦のための万国博）も生み出されたといえる。ベトナム戦争終結により、1974年1月に東京の神楽坂ベ平連は解散するが、その後の日本の市民運動・住民運動に多大な影響を残した。

##### ○反戦のための万国博協会（ハンパク協会）

ハンパクの準備・運営の中心を担った事務局。ハンパクを発案した南大阪ベ平連（なんだいべ）・関西ベ平連のメンバーを中心に構成されている。代表は哲学者・評論家、桃山学院大学教授の山田宗雄、事務局長は元桃山学院大学の事務員で、関西ベ平連の木村満彦が務めた。ハンパクは、1969年1月頃から準備が始まり、ハンパク協会の設立によって、開催に向けての取り組みが本格化する。ハンパク協会は、会場の準備のほか、ベ平連のネットワークを通じた街頭カンパやグッズの販売などで資金を集めた。また、ハンパク開催前に大阪と東京でプレハンパクとして講演会やフォーク集会を実施し、宣伝にも力を入れた。

##### ○山田 宗雄（1925-）ハンパク協会代表

哲学者、評論家。山口生まれ。京都帝国大学文学部哲学科を卒業。桃山学院大学、関東学院大学などで教鞭を執る。ジャーナリズムでは評論家として活動し、1962年には『思想の科学』の編集長を務めた。1965年に刊行した『危険な思想』は、保守派の知識人を厳しく批判した内容で、論壇に賛否を巻き起こした。日本古代史の研究でも知られる。ハンパク協会の代表を務め、ハンパク開催直前の1969年8月4日には、大学運営に関する臨時措置法案の抜き打ち採決に抗議し、桃山学院大学社会学部教授を辞職した。山田は、ハンパクは「無名市民の祭り」であり、反戦・反安保という「無名人の直接意志を、直接つなぎ合わせる可能性の一つを、示していた」（『ハンパク』の思想と行動『毎日新聞』1969年8月27日夕刊）と述べている。

##### ○山本 健治（1943-）関西ベ平連

大阪生まれ。立命館大学法学部を卒業。在学中は一部法学部自治会・一部学友会の委員長、京都府学連副委員長などをつとめた。卒業後は大阪読売広告社、村田製作所に勤務する傍らベ平連に参加し、御堂筋デモや大阪駅前での街頭デモ、毎週末には梅田地下街でフォーク集会を開催した。西は姫路から東は名張まで、関西における地域ベ平連の活動をまとめる「関西ベ平連」を

発足させ事務局に就任、旗振り役・調整役として活動した。その活動の一つがハンパクであった。1969年には村田製作所労働組合の専従書記長となり、労働運動に専念する。高槻市議会議員（1975-83年）、大阪府議会議員（1983-87年）もつとめた。現在は、フリーライターとして寄稿する一方、関西を中心にテレビやラジオのコメントーターとしても活動している。

##### ○木村 満彦（1942-）関西ベ平連、ハンパク協会事務局長

大連生まれ。引き揚げ後は岐阜の親戚方に身を寄せ、小学校から名古屋に転居。高校時代に60年安保を経験する。1962年に関西学院大学社会学部に入学、社会科学研究会に所属した。自治会委員長を経て、兵庫県学連副委員長時代に山本健治と出会う。1966年に桃山学院大学産業貿易研究所の職員となるも、ハンパク協会事務局の専従となるため辞職。その後、全国電気通信労働組合近畿地方本部で書記として労働運動に取り組んだのち、実家のガラス店を継ぐ。

##### ○小田 実（1932-2007）ベ平連代表、ハンパク呼びかけ人

小説家。大阪生まれ。東京大学文学部言語学科を卒業。アメリカ留学を機に世界一周を貧乏旅行した体験記、『何でも見てやろう』（1961）がベストセラーとなり、以後、論壇・文壇での本格的な活動が始まる。鶴見俊輔の誘いにより、1965年4月に結成されたベ平連では代表となった。また、自身の戦争体験に発する被害と加害の連関を指摘した『戦死の思想』は、ベトナム反戦運動の思想的機軸となった。ベ平連解散後も、市民運動や文学活動に精力的に取り組んだ。小田は、ハンパクの開会式で「ハンパクの意義は、民衆のための反戦と解放の広場をつくることだ」とあいさつし、「70年反安保運動への飛躍台」となることを期待した（『ハンパク大阪版の陣』『サンデー毎日』48号、毎日新聞出版1969年）。

##### ○鶴見 俊輔（1922-2015）ベ平連、ハンパク呼びかけ人

哲学者・評論家。東京生まれ。ハーバード大学哲学科を卒業。1946年、姉の鶴見和子、丸山眞男、都留重人らと思想の科学研究会を結成し、雑誌『思想の科学』を創刊。敗戦後間もなくはプラグマティズムや論理実証主義といった欧米の最新思想を紹介した。1950年代からは、知識人の戦争責任を問う「転向」の共同研究、大衆の文化や生活から思想をすくい上げる大衆文化研究などを行った。また、新たな芸術の概念を提唱した「限界芸術論」でも知られる。2004年には、小田実や加藤周らと共に「九条の会」の呼びかけ人となった。1965年のベ平連結成の際には主導的役割を果たし、1969年のハンパクでは、会場に足を運び「思想と行動」をテーマに開かれたハンパク市民大学の講師を務めた。

##### ○小川プロダクション

映画監督の小川紳吉が1968年に設立したドキュメンタリー映画制作のためのプロダクション。成田空港建設に反対する農民たちの運動の様子を、農民たちと生活を共にしながらえがいた一連の三里塚シリーズ（1968-77）など、ドキュメンタリー映画の秀作を生み出した。小川プロは全国各地で上映運動も展開し、プレハンパクでも上映された。ハンパクでは、小川プロから上映機材が貸し出され、小川監督の『青年の海 四人の通信教育生たち』（1966）、『庄敷の森 高崎経済大学闘争の記録』（1967）、『現認報告書 羽田闘争の記録』（1967）、『日本解放戦線 三里塚の夏』（1968）が上映された。1994年に解散。

#### 立命館大学国際平和ミュージアム 第125回ミニ企画展示

#### ハンパク1969 一反戦のための万国博

会期 2019年7月17日(水)～8月24日(土)

種別	品名	価格	出品者
書籍・雑誌	1 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	2 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	3 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	4 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	5 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	6 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	7 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	8 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	9 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	10 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
ポスター	11 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	12 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	13 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	14 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	15 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	16 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	17 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	18 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	19 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	20 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
ポスター	21 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	22 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	23 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	24 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	25 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	26 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	27 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	28 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	29 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	30 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
ポスター	31 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	32 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	33 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	34 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	35 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	36 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	37 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	38 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	39 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル
	40 反戦文化フェスティバル	1969年4月12日	反戦文化フェスティバル

4. 年表「ベ平連と「ハンパク」のうごき」（作成：福井優）

西暦 (昭和)	月	ベ平連のうごき	日本・世界のおもなできごと
1965 (40)	2	北爆開始、ベトナム戦争激化	
	4	ベトナムに平和を！市民連合（ベ平連）発足	
	6		日韓基本条約調印 教科書検定を違憲とした裁判（家永裁判）
	10	月刊『ベ平連ニュース』創刊	
1966 (41)	7		「ウルトラマン」放送開始
	8	「ベトナムに平和を！日米市民会議」開催	
	10	日本労働組合総評議会がベトナム反戦統一ストを実施、国際反戦デーの始まり	
1967 (42)	2	京都ベ平連機関誌『ベトナム通信』創刊	
	6		第三次中東戦争（六日間戦争） 新潟水俣病訴訟
	7		ヨーロッパ共同体（EC）結成
	8		公害対策基本法施行 東南アジア諸国連合（ASEAN）結成
	9		四日市公害訴訟
	11	ベ平連、米航空母艦「イントレピッド」から脱走の4水兵、日本から脱出を発表	
1968 (43)	1		東大紛争など全国で大学紛争おこる 「プラハの春」（チェコスロバキア）
	3		イタイイタイ病訴訟
	5		フランス五月革命
	6	2日、九州大学工学部構内に米空軍のジェット戦闘機ファントムが墜落	小笠原諸島返還される
	7		核拡散防止条約調印
	8	ベ平連、「反戦と変革に関する国際会議」京都で開催	
	10	9日、南大阪ベ平連が大阪府職員ベ平連と共に「反戦文化フェスティバル」を開催	
1969 (44)	1	南大阪ベ平連の若者達が「反戦のための万国博（ハンパク）」を発案	東大安田講堂に機動隊 8500 人出動（374 人逮捕） 東大闘争支援の学生・市民ら、御茶の水駅・明大・中大付近の道路をバリケード占拠、交通麻痺（神田カルチェラタン）
	2	1・2日、第3回ベ平連全国懇談会で「反戦万博」（南大阪ベ平連・関西ベ平連が提案）の開催が決定 28日、東京フォークゲリラ初集会	日大文理学部の封鎖解除に機動隊導入（以後、各大学で相次ぐ）
	4	29日、「反戦のための万国博推進準備会議」が大阪で開かれ、計画の骨子が決まる	
	5	29日、京都ベ平連が第1回「橋の下大学」を三条大橋のたもとで開く 30日、大阪プレ反博「万国博とわれわれの思想」開催	
	6	15日、日比谷野外音楽堂で「反戦・反安保・沖縄闘争勝利6・15統一行動」 26日、ハンパクフォーク・コンサート「音楽をわれらにそして民衆の中に」開催	熊本水俣病訴訟
	7	1日、ハンパク協会東京事務局が『ベ平連ニュース』46号に「反バク宣言」を発表 26日、大阪プレ反博「われわれの芸術創造」開催 27日、京都ベ平連が「反戦祇園祭」を開く	同和対策事業特別措置法制定 人類、はじめて月に到達（アポロ11号月面着陸）

	8	4日、ハンパク協会の山田宗睦代表が大学措置法の抜き打ち採決に抗議し、桃山学院大教授を辞職 6日、山田宗睦代表らがハンパクについて記者会見 7日、「反戦のための万国博（ハンパク）」、大阪城公園で開催（～11日） 10日、ハンパクに併せ、第4回ベ平連全国懇談会が開催	アメリカ・ニューヨーク州で「ウッドストック・フェスティバル」が開かれる
	11	『週刊アンボ』創刊	
1970 (45)	3		核拡散防止条約（NPT）発効 日本万国博覧会（大阪万博）（～9月） 赤軍派が航空機「よど号」をハイジャック（よど号ハイジャック事件）
	6	安保反対全国統一行動	日米新安保条約自動延長
	11		三島由紀夫自殺
	12		コザ市で沖縄住民が米軍を焼き打ち（コザ事件）
1971 (46)	4	ジャテック機関誌『ジャテック通信』創刊	
	6		沖縄返還協定調印
	9		新潟水俣病訴訟判決、原告側勝訴
	10		中華人民共和国、国連での代表権を得る
	12		ニクソン・ショックに伴うスミソニアン協定により円切り上げ
1972 (47)	2	ベ平連、山口県岩国市に反戦喫茶「ほびっと」を開店	冬季オリンピック札幌大会開催 元日本軍兵士の横井庄一さん帰国。同じく74年3月に小野田寛郎さん帰国 連合赤軍が人質をとり浅間山荘に立てこもる（浅間山荘事件）
	5		沖縄諸島返還される
	7		四日市公害訴訟判決、原告側勝訴
	8		イタイイタイ病訴訟判決、原告側勝訴
	9		日中共同声明（国交正常化）
1973 (48)	1		拡大EC発足 ベトナム和平協定調印
	3		熊本水俣病訴訟判決、原告側勝訴 小松左京『日本沈没』刊行。ベストセラーに
	8		韓国の民主化運動を進める金大中が日本で拉致される（金大中事件）
	10	アジア太平洋資料センター（PARC）設立	第四次中東戦争（石油危機おこる）
1974 (49)	1	ベ平連解散	
	6	「第1回アジア人会議」開催	
1975 (50)	4		ベトナム戦争終結

### 【謝辞】

本展の開催にあたっては、以下の関係機関および各位には多大なる御厚情を賜りました。この場を借りて御礼申し上げます。アテネ・フランセ文化センター、喫茶店ウッドノート、九州大学大学図書館、国立歴史民俗資料館、成田空港 空と大地の歴史館、毎日映画社、桃山学院史料室、立教大学共生社会研究センター、立命館史資料センター、江藤俊一、折田悦郎、木村京子、木村満彦、倉田光一、齋藤重、武内俊造、玉置栄二、利光孝憲、波多野ゆき枝、原

山浩介、平野泉、深見康子、山本健治（団体個人別・五十音順・敬称略）。

### 【注】

- 1) 国際平和ミュージアム 平和教育研究センター メディア・資料セクター長、文学部教授
- 2) 国際平和ミュージアム 平和教育研究センター 副センター長、文学部教授
- 3) 国際平和ミュージアム 平和教育研究センター リサーチャー、立命館大学生存学研究所客員研究員、滋賀県立大学人間文化学部准教授

- 4) 国際平和ミュージアム 平和教育研究センター リサーチャー、立命館大学生存学研究所客員研究員
- 5) 国際平和ミュージアム 平和教育研究センター リサーチアソシエイト、立命館大学大学院 文学研究科博士課程後期課程大学院生
- 6) 国際平和ミュージアム 学芸員
- 7) 国際平和ミュージアム 学芸員
- 8) 国際平和ミュージアム 学芸員
- 9) 針生一郎「反博——反戦運動の試行錯誤」『現代の眼』1969年10月号、鶴見良行「ハンパクの五日間——予言的な“小さな実験”」『朝日ジャーナル』1969年8月24日号、小田実「『ベ平連』・回顧録でない回顧」第三書館、1995年など。
- 10) 黒ダライ児『肉体のアナーキズム』grambooks、2010年
- 11) 平井一臣「戦後社会運動のなかのベ平連——ベ平連運動の地域的展開を中心に」『法政研究』71巻4号、2005年及び黒川伊織「地域ベ平連研究の現状と課題」『神戸大学国際文化学研究推進センター研究報告書』2015年度号、2016年
- 12) 同集会の記録は、「あの日 あの時 この時代」記念誌編集委員会『あの日 あの時 この時代 —ファントム墜落五十周年・さよなら九州大学箱崎キャンパス』花書院、2018年を参照。
- 13) 玉置栄二「目録「学生運動ビラと関連資料（1963-1974）」から見る本学の学生運動」『桃山学院年史紀要』27号、2008年、382-309頁を参照。
- 14) 「ハンパク」に言及した近年の先行展示としては「1968年激動の時代の芸術」（2018年～19年：千葉市美術館、北九州市美術館、静岡市立美術館）と「アジアにめざめたらアートが変わる、世界が変わる 1960-1990年代」（2018年：東京国立近代美術館）『1968年』無数の問いの噴出の時代」（2018年：国立歴史民俗博物館）がある。